

第一群研究発表

1 鼻腔栄養チューブ挿入前の不安に関する報告

— S T A I における特性不安と状態不安の比較検討より —

神戸大学医療技術短期大学部

○川 畑 摩紀枝(28回生)

鈴木 志津枝(22回生)

津田 紀子(10回生)

野崎 香野(2回生)

高知女子大学

川西 千恵美(26回生)

はじめに

看護者は患者がはじめて体験する処置に際して不安状態に陥りやすい人を探り、その人々を援助する役割を持っている。鼻腔栄養チューブを初めて挿入される時、患者は身体を正常に保持することを脅かされ、ストレスにより不安をひき起こす。しかし、その不安のレベルは様々で自分自身で解決できる状態から、拒絶反応を起こすなど他人の援助を必要とする状態まである。

不安の定義についてMay¹⁾は“その個人が一個のパーソナリティーとして存在する上に、本質的なものと解されるある価値が脅かされる時かもしれないとされる気がかりである”と述べている。また、Spielberger²⁾は不安を二面よりとらえ、それぞれ特性不安、状態不安とした。特性不安とは不安状態の経験に対する個人の反応傾向を示すものであり、状態不安とは、個人がその時おかれた生活条件体により変化する一時的な情緒状態である、と定義づけている。

我々は、チューブ挿入時の患者の不安軽減の必要度を知る目的で、平常時の不安傾向とチューブ挿入時の不安状態との関係を検討したので報告する。

対象と方法

研究対象は、神戸大学医療技術短期大学部看護学専攻の3年生31名で、その年齢分布は20～21歳であった。不安測定のための心理テストとして、Spielbergerらの考案したS T A I (the State-Trait Anxiety Inventory)をもとに、日本で開発された関学版S T A I³⁾(以下S T A I)を使用した。

実施時期は63年4月の学内実習時で、鼻腔栄養チューブ(テルモ社製サフィードフィーディングチューブFr. 8号)を挿入される直前にS T A Iを実施した。また、平常時のS T A Iは、学内実習の行われる1週間前の講義時に集団で実施した。

結 果

結果の分析にあたり、平常時の特性不安の平均+1SDと平均+2SDの間の学生を高特性不安群とし、平均-1SDと平均-2SDの間の学生を低特性不安群とした。そして、この両群間で状態不安の比較をした。

両群間における平常時の状態不安の比較を表1に示した。両群間における状態不安に有意差はみられない。また、両群間におけるチューブ挿入前の比較(表2)では、状態不安は低特性不安群の方がやや高くなっているが有意差はない。平常時とチューブ挿入前の状態不安の比較(表3)では、低特性不安群の方が挿入前に比べ有意に上昇している。

対象者全員の平常時とチューブ挿入前の状態不安は、1%の危険率で有意な差がみられた。(表4)

表1 平常時のSTAIの結果

	対象数	特性不安		状態不安	
		mean	SD	mean	SD
高特性不安群	6	61.33	1.63	43.00	4.05
低特性不安群	3	40.67	0.58	36.00	10.81

表2 チューブ挿入前のSTAIの結果

	対象数	特性不安		状態不安	
		mean	SD	mean	SD
高特性不安群	6	56.50	9.01	52.50	8.31
低特性不安群	3	44.33	4.93	58.33	6.03

表3 平常時とチューブ挿入前の状態不安についてのテスト結果

	対象数	平常時		チューブ挿入前	
		mean	SD	mean	SD
高特性不安群	6	43.00	4.05	52.50	8.31
低特性不安群	3	36.00	10.81	58.33	6.03 **

** P<0.05

表4 対象全員の平常時とチューブ挿入前の状態不安の比較

n=31		
	mean	SD
平常時	42.10	7.48
挿入前	52.41	9.86

P<0.01

考 察

鼻腔栄養チューブの挿入は、対象者全員の平常時と挿入前の状態不安の比較に有意な差が認められていることから、初めて体験する学生にとって不安を惹起する状況であることは確認された。しかし、不安を感じる程度はその状況、性格、経験などに左右され、個人差が大きく同じ場面に遭遇しても同様に不安を感じるとはかぎらない。我々は、不安状態になりやすい性格に着目して分析を試みた。

特性不安と状態不安の関係についてSpielberger²⁾らは、個人の適切さが評価されるような事態や状況では、不安特性の高い人は不安特性の低い人よりもより驚異を強く感じたと述べている。我々の結果のチューブ挿入前の不安状態では、不安特性の高い学生は変動がなく、不安特性の低い学生は不安状態が上昇した。これは、鼻腔栄養チューブの挿入時には、日頃不安傾向の高い学生よりも低い学生の方が不安状態におちいりやすいことを示している。

本明⁴⁾は“Lazarusのコーピング理論”でLazarusのストレス観を紹介しているが、それによるとストレスは、刺激、認知的評価・対処法、反応カテゴリーの3つの部分より構成されており、認知的評価を変化させることによってストレスが軽減されると述べている。また、水口⁵⁾の研究でも麻酔や手術に関する事柄をごく微弱なものから強いストレスへ慣れさせると不安は軽減すると報告されている。学生は鼻腔栄養チューブを過去に挿入された経験もなく、また、挿入の直前に行う教師のデモンストレーション以前には挿入場面を実際に見学しておらず、チューブ挿入に対する認知的評価を変化させることが不可能に近いため不安傾向の低い学生の不安をもひき起こしたと考えられる。基礎知識を十分に持っている看護学生の不安の高さは、チューブ挿入前の患者の不安がより高いことを合わせ、初めて挿入する患者への説明の重要性を示唆していると言える。

また、不安傾向の高い患者はストレス状態では、脈拍増加、血圧上昇など必要以上に不安の身体症状を現すが、一方、低い症例では、一過性の不安状況を起こすが、やがて安定した状態に達するという。10分程で終了するチューブの挿入では不安状態の変化はみられず一様に上昇した結果となったことも考えられる。

しかし、前回の我々の研究⁶⁾でも、採血を実施する前の学生の不安は、特性不安の高低に影響され

ていなかった。また、学生の学習課題の作業検査と不安の関係について Spielbergerらの研究⁷⁾によると、特性不安が高く、状態不安の低い学生はいつもどのグループよりも優れていて、特性不安が低く状態不安の高い学生は、他のグループよりも劣っていたという結果が得られている。

以上のことより、患者に鼻腔栄養チューブを挿入する場合は、日頃不安傾向の高い患者ばかりに注意をそそぎがちであるが、不安傾向の低い患者にも同様に援助が必要であるといえる。

ま と め

看護学生の鼻腔栄養チューブ挿入の学内実習時に、STAIを用いて挿入されるときに不安状態を特性不安の違いより検討した。結果は以下のとおりである。

- 1) チューブ挿入前の状態不安は低特性不安群では有意に上昇したが、高特性不安群では有意な上昇はみられなかった。
- 2) 初めてチューブを挿入する患者へは、挿入前に十分な説明が必要であることが示唆された。
- 3) 初めてチューブを挿入する患者の場合は、不安傾向の高低に関係なく不安に対する援助が必要である。

文 献

1. Rollo M. 小野泰博訳：不安の人間学、誠信書房、1965、P153
2. Spielberger CD, Gorsuch RL. and Lushene RE: Description Administration Scoring In STAI Manual for the State-Trait Anxiety Inventory. Consulting Psychologists Press. Inc. California. 1970 P3
3. 曾我洋子：STAI(The State-Trait Anxiety Inventory) について、看護研究、17:107 1984
4. 本明 寛：Lazarusのコーピング理論、看護研究 21:225 1988
5. 水口公信：麻酔と行動科学、日本保健医療行動科学会年報 2:57 1987
6. 川畑摩紀枝、川西千恵美、祖父江育子他：看護学生の不安と性格に関する研究、神戸大学医療技術短期大学部紀要 3:159 1987
7. Spielberger CD, Gorsuch RL. and Lushene RE: Current Research with the STAI Manual for the State-Trait Anxiety Inventory. Consulting Psychologists Press. Inc. California. 1970 P16